ミニ内航海運史 Ⅵ　江戸時代　その５

各地の河川舟運

(1) 最上川（山形県）

最上川は、山形県米沢市の福島県との境にある吾妻山付近に源を発し、山形県中央部を北に流れ、新庄市付近で西に向きを変えて酒田市で日本海に注ぎ、源流から河口まで総延長 229km の流路がひとつの県内に流れている。最上川流域は、上流の米沢盆地、中流の山形盆地、下流の庄内平野など有数の穀倉地帯を抱え、既に奈良時代の和銅年間（708 ～ 715）に水稲農耕が発達していたと伝えられ、灌漑（かんがい）を中心とした利水整備の河川開発が進められていた。

最上川は内陸の重要な交通路としても利用され、舟運の発達によって最上川の整備も必要となったが、中流部から下流部にかけては難所が多く、水運発達の最大の難点となっていた。河口部の酒田は、戦国時代に堺や博多と同様の自治港湾都市として、奥羽随一の商業都市に発展して行った。

現在の酒田港（写真提供 ： 酒田市）

関ヶ原の戦いの後に酒田を統治した最上義光（1546 ～ 1614）は慶長 17 年（1612）、酒田と山形を水運で結ぶため、最上川の整備に着手し、現在はいずれも山形県村山市に属する最上川中流 3 難所・碁点の瀬（ごてんのせ）、三ヶ瀬（みかのせ）、隼の瀬（はやぶさのせ）を開鑿して川幅の拡張と川底の掘削を進め、舟運の円滑化を図った。これにより水運は発達し、各所に河岸が建設された。特に荒砥（あらと）河岸は藩の陣屋が設置された他、造船所まで整備されていたといわれている。

寛文 12 年（1672）、徳川幕府の命を受けた豪商・河村瑞賢（かわむらずいけん＝1617 ～ 1699）が酒田から下関を結ぶ北前船の西廻り航路を開通させると、酒田はさらに重要な経済都市として発展した。養子となって第四代米沢藩主・上杉綱憲（1663 ～ 1704）統治下の元禄 6 年（1693）、藩御用商人・西村久左衛門（生没不祥）は酒田と内陸部を結ぶため、最上川上流部の難所・五百川峡（いもがわきょう）黒滝地点を開鑿（かいさく）

出展： 美しい山形・最上川フォーラム

し、これによって米沢から酒田までの水運が整備され、流通経済が出羽地方でもさらに発達して行った。最上川には、各地に大規模な河岸と舟着場が発達したが、代表的な河岸として河口の酒田、清水（大蔵村）、村山地方の大石田、左沢（大江町）、置賜（おきたまち）地方の荒砥（白鷹町）、宮（長井市）などがあり、特に酒田と大石田が名高い。

最上川古口の船番所跡（出典:芭蕉庵ドットコム ： http://www.bashouan.com/

最上川の舟運は当初、領主の年貢米輸送路として開発されたことから、米の輸送が中心だったが、河川と流域各地が整備されたことにより、米だけでなく内陸の染料や食用油原料の紅花（べにばな）、繊維原料の青苧（あおそ）などの特産品等が河口の酒田港へ集積され、さらには大豆、小豆、たばこ、蝋（ろう）、漆（うるし）、菜種なども北前船で大阪や京都へと送られて行き、上方から酒田へとして塩、干魚、茶、繰綿（くりわた）、瀬戸物などが大量に運ばれた。さらに、紅花商人によって上方から雛人形、蔵座敷などがもたらされた。その他にも仏檀、瀬戸物などが流域各地に伝わり、新庄、大石田、谷地の祭の山車と囃（はやし）は京都の祇園祭りの流れをくみ、京風の言葉遣いなどが定着した。このように、最上川流域は内陸の地にありながら、上方文化の強い影響下に置かれ、また紅花など最上川舟運がもたらす富は、芭蕉を始めとする多くの文人墨客（ぶんじんぼっかく）を流域各地に招くこととなり、「最上川は文化をもたらす水路」として全国的にも際立った役割を果した。

酒田市に現存する小鵜飼船。米を 350 俵程度積んだとされる（写真 ： Admedia）

最上川を通行する舟は幕府の統制下におかれ、艜船（ひらたぶね）は左沢～酒田間、小鵜飼舟（こうかいぶね）は上流の糖野目（高畠町）～左沢間を航行するよう定められた。

【本稿は、次のホームページから一部引用または参考にしました】

◇国土交通省河川局「河川伝統技術データベース：分類別リスト（舟運）」
http://www.mlit.go.jp/river/pamphlet_jirei/kasen/rekishibunka/kasengijutsu07-11.html
◇美しい山形・最上川フォーラム「最上川の歴史（舟運文化）」
http://www.mogamigawa.gr.jp/
◇ウィキペディア「最上川」
http://ja.wikipedia.org/wiki/